　アーティストインタビュー
生田恵さん

—生田さんのこれまでの人生の年表をさらっていきたいと思うんですけども、幼少時の生まれだったりとか、どんなお子さんだったかっていうのをお聞きしていきたいんですが、よろしいでしょうか？

生田：生まれは仙台、生まれも育ちも仙台です。なんだろう？　おとなしいほうだったんではないかと思います。おとなしかったけど、なんというか、ストレスが積もりに積もって途中ではっちゃけて（笑）。学校に行ったり行かなかったりして。でも、なんていうか、すごいビビりなので。暗いところが怖いとかそういう理由で、夜遊びはしませんでした。学校は行っても、隣の給食準備室にいたりとか、そういうことはありました。そんな感じ？　演劇は、中学校の部活から演劇部だったんですけど。元々は演劇部じゃなくて、合唱部とか見学に行こうかなと思ってて。で、友人に「どうすんの？」「部活どうする？」って聞いたら、「私、演劇部入る」とかって言われて、演劇かと思って、一緒にくっついて行って、仮入部を一緒にして、現在に至るみたいな。

—生田さんの家族構成っていうのをお聞きしてもよろしいですか？　ごきょうだいとかいらっしゃるのかなと思って。

生田：そうですね。兄が上に２人います。兄は、一番上は９つ離れてて、その上は６つ離れてますね。なので、ちょっと年の離れた兄に育てられました。なんか、母とあんまり折り合いが良くなくて、父はすごく忙しかったんで、家庭のことはあんまり。でも兄たちは、子供の頃いろいろ遊びに連れてってもらったりしたんですけど、私はあまりもうそういうのはなくって。あと母がどうも昔の人だったので、男尊女卑というか、女の子はいいから、あんたはいいからみたいな感じで。割となんというかないがしろにされて育って、それを長男が、いろいろ叱ったり、褒めたりして、で、実質長男に育ててもらいました。

大河原：一番上のお兄さんが９個上ですか？

生田：9個上です。でも9個上の兄も、大学に入ると同時に実家を出てしまったので。私が10歳くらいの時に兄がもういなくなってしまって、ああ、どうすんだみたいな感じになって。で、そっからなんで、ちょっと、学校も。小学校のうちは一応行ってたんですけど、あんまり行きたくないって言ったりとか、家で母とちょっと折り合いが悪くて、家に居場所がなかったりで。それが次に次男も大学で家出ちゃったりとかすると、今までずっと放っておかれたのに一局集中してきて、それが耐えられなくて。高校を卒業してすぐに、とりあえず家をなんか出てみたりとか、そういう。その頃、ちょうど劇団を旗揚げしてるんですけどね。そんなことはありました。

—学校に行かないけど、おうちにも居場所がないということで。どこで、お部屋とかで過ごされてたんですか？

生田：なんかね、小学校の時はそれでも頑張って学校には通ってたんですけど、中学校になってから、学校に行ったけど、教室にいないみたいな、そういうことは多々あったかな。一緒に仲良くなった子のおうちにいたりとかね。

—友人関係とか、でも結構幅広くいらっしゃったんですか？

生田：教室の中であんまり仲いい友たちができなくて、それはあんまり積極的に行ってなかったからかもしれないですけど。一応通ってはいたはずなんですけど、中学校ぐらいは。どうなのかな。覚えてないな。それで、やっぱり学校からなんかちょっとはみ出しちゃった感じの子たちと仲良くなっていたような気がします。でもそれと、さっきね、演劇部に入るって言って仮入部くっついていった子は、言っても普通に学校通ってたので、その子が頼りになった部分も結構あって。

—そのご友人はどんな、自分にとってどんな存在というか、どんなキャラクターだったんですか？

生田：どんな存在？　あの人がいたから今まで演劇続けてるみたいな、ぐらいはあるかな。

—今もお会いされたりしますか？

生田：一緒に劇団をやっております（笑）。

—すてきな体験ですね。中学生の時に演劇部に入部して。中学時代の演劇部のエピソードもぜひ聞かせていただきたいです。

生田：中学時代はね、でも、中学生だと基本には先輩がいて、なんか教えてもらって、でも中学、高校とかそういう感じかな。あとは部室にあった本を読んでみたり。でも自分たちも何も経験も知識もないし、先輩から教わるって言ってもね、なんか大きな声を出す練習をしてみたりとかね、そんな感じですね。でもなんかそうやって、何かを通して人と関わっていくってことが楽しかったんだと思うんです。教室には仲いい子がいないし。はみ出しちゃった子たちと遊んではいたけど、でも、そっちの子たちとも全く一緒にはいられないんですよ。夜遊びしないからね。学校抜け出してお友だちんちに遊びに行ったりとか、教室じゃない教室で一緒に遊んだりとかはできても、彼らともまたなんか一線置かれる立場だったので、すっかりそっちにも傾倒できないし。なんで、部活で、演劇部の中で、本を読みながら人とやり取りしたりとか、ここはこうなんじゃないのとかって言いながら、一緒に、文化祭かな、中学だと、とかを目指してやっていく時が、たぶん楽しかったんだと思うんです。いっぱいけんかとかもしたと思うけど。それで高校に入っても続けようっていうふうに、その時は遠い先とか見えてないんで、まずじゃ次どうするみたいになった時に、中学卒業して、高校は友人とはバラバラだったんですけど。どうすんのっていう話をして、続けるみたいな感じで、それぞれ続けてましたね。

大河原：高校ってどちらだったんですか？

生田：私はウルスラでした。ウルスラは、演劇部自体はすごい弱小で、もうたぶん今ないんですけど。でも、なんとかそこでも部活のメンバーには恵まれて。どうにか。で、高校に入って、部活、でもね、部活も１年目とか良かったですよ。先輩すごいよくて。で、２年目なったら後輩がいっぱい入ってきちゃったんで

す。うちらの代、少人数で先輩も３人ぐらいしかいなくて、そこに 10 人ぐらいわっと入っちゃってたので、もうすっかり、なんかもう口が出せないような感じになって、端っこでシュンとしてて。なんか、部活にまでついに場所がないみたいになった時に、なんか高フェスに誘われたんですよ、そういえば。なんか友だち、別な学校の演劇部の人から、高校生フェスティバルっていうのやってんだけど、生田さんも遊びに来てみないみたいな感じで、それで高フェスに行くようになって。高フェスでもステージの演劇とかミュージカルみたいなとこの担当になってましたけど。そこですっごいいろんな学校の人たちと、１日中なんか議論を交わすみたいな。そういうことをしてました。

—学生時代は役者でやっていらっしゃったんですか？

生田：役者でしたね。そういえば。

—高校生フェスティバルっていうのは、演劇祭みたいなものなんですか？

生田：高フェスは、なんだろう、高校生フェスティバルっていうんですけど、学校を超えて高校生たちが集まってイベントするみたいなやつで。その時は市民会館を借りて、ステージの上演もあったし、なんか企画がいくつかあって。伊豆沼から歩いて来るウォークっていう企画があったりとかして、その本番に間に合うように、伊豆沼出発してわーっと、何キロも何キロも、三十何キロ、もっとあるかな。（※実際は約 70km）歩いてきたりとかね。そういう企画があったりとかして。で、企画だけじゃなくて、企画、広報とか、全体を回してる本部みたいなところとかも全部自分たちの高校生でやって、そのイベント１つ作り上げるみたいなやつだったんです。それに参加してて、そこはね、ものすごい楽しかったですよ。そういうのやりつつ、でもそれは、一応２期参加したのかな。高２、高３の時に参加していて。それと同時に、やっぱりどうしても演劇がやりたいもので。高校演劇コンクールはあるんですけど、コンクールの実行委員会のほうやってたんですね。自分の学校の部活はちょっと居場所なくなっちゃったけど、実行委員会のほうで、ほかの高校の演劇部の友たちといっぱいしゃべる機会があって。自分がたぶん高フェスとかもやってて自信もついてたんだと思うけど、なんか一緒に集まってやろうよみたいな感じで、高校の垣根を越えてやりたい子

たちと一緒にプロデュース公演とかしました。高校３年生ぐらい、２年、３年。２回ぐらいたぶんやってて。それこそエルパとか使って、高校生だけで、今思えばよく貸してくれたなって感じですけど、やってましたね。

—自分の劇団立ち上げようっていうそこの気持ちというか、もうちょっと詳しく聞きたいなと思っていて。

生田：それね、何でなんだか今だに分かんないんですけど。別に、みんな面白いと思ったし。でもたぶんね、瀧原さんと何かやりたかったんですよ、私。きっとね。根っこはそこなのね。一緒にやろうって言って。あの人、たいていお断りしない人なので。いいよって言って。一緒に始めて。いろいろ自分の中に、たくさん経験させてもらったって言ったけど、たくさんもらったけど、出して行くことに関しては、本当に全然なんか、未発達というか、未熟なというか。俳優として、プロデュース公演とかやってはいたけど。劇団になって作品を作ってっていうふうなところってまたちょっと違うじゃないですか。それで自分たちの作品を作るっていうふうなことで発信していくことに関しては、本当にゼロの状態からやり始めて。で、ずっと、稽古場でもそうだし、終わったあとにしゃべったりとかっていうのを、瀧原さんと２人でね、なんかずっとやってきたわけですよ。で、瀧原母が、またこれが鋭い人で、ずっと芝居、毎回観に来てくれて。もう痛烈なだめ出しを残して。長くないんですよ。ほんの短い痛烈なだめ出しを残して、それを聞いて、うーんみたいになるっていうのが毎度のね、劇団旗揚げ当初は、そういうのがあったりとかして。あれも良かったな。あれも若い頃の私たちには必要な。なんでしょうね。だから。なんか自分の中に、特別これがやりたいとかいうのがあったわけじゃなくて。でもやってるうちに、三角フラスコのお芝居っていうのがだんだんできてきて。そうやって続けてきたらそのうち、割と何をやっても、「あ、これは三角フラスコのお芝居だよね」みたいに言われるようになって。あと今回久しぶりにやるけど、そのチラシとかも、作った人とか全然違うのに、「なんかすごい初期の頃の三角フラスコって感じだよね」みたいに言ってもらったりとかして。どうもみんなの中に三角フラスコ像があるらしいっていうことを、この間もしゃべっていたんですけど。そんな感じ。あれ、質問に答えられてるかな。

—生田さんが、演劇を放さずに、ずっと過ごしてきたって何でですか？誤解を恐れずに言えば、絵永けいさんにとっての石川裕人さんのように、生田さんには瀧原弘子さんがいるから、とも思えるし。

生田：それはね、その通りなの。そこで言い切っちゃって全然大丈夫ぐらい。あとは、演劇してなくてもさ、何にもしてなくても、毎日時間は過ぎて、人は歳をとっていくでしょ。目的とかはさ、人間だって動物なのでさ、生きるために生きてんだけど、その生きるっていうことの中身が、なんていうのかな、ただ、ただ時間を、時間を無為に過ごすのではなくて、演劇をやってることが私にとっての生きることっていうか。そういうことかなと。やってなくて何もしないでどんどんどんどん時間は過ぎてったりするんだけど。演劇をやってる私のほうが、どんなに大変でもなんか好きっていうか、それをよしとしてるっていうか。なんかそれがなかったらとっくになんか、やんなっちゃってるかもしれないなとかさ。